学位論文題名

日本語と韓国語の機能動詞に関する対照研究

学位論文内容の要旨

1) 論文の構成

第1章	序論	
1.	研究目的と意義	1
2.	本稿の構成	4
第2章	機能動詞結合の構成要素の性質	
1.	はじめに	5
2.	先行研究	
2. 1	日本語における先行研究	5
2. 2	韓国語における先行研究	8
第3章	機能動詞結合に統語的な性質	
1.	はじめに	20
2.	動作名詞	24
3.	機能動詞	26
4.	まとめ	28
第4章	機能動詞結合と各表示	
1.	はじめに	29
2.	先行研究	29
3.	機能動詞と補助動詞	30
4.	機能動詞結合と他の語結合	37
5.	まとめ	45
第5章	機能動詞結合と格表示	
1.	はじめに	47
2.	機能動詞の内部に現れる助詞のパターン	47
3.	機能動詞結合の外部の格表示	48
3. 1	日本語の場合	49
3. 2	韓国語の場合	55
4.	まとめ	59
第6章	動詞表現から名詞表現への変化	
1.	はじめに	61
2.	機能動詞結合使用の意義	61
3.	修飾成分	66
4.	まとめ	69
第7章	日韓語における機能動詞結合	
1.	はじめに	70
2.	ヴォイス的な意味を表す機能動詞	72
3.	アスペク的な意味を表す機能動詞	78
4.	ムード的な意味を表す機能動詞	81
5.	まとめ	81
第8章	日韓語における機能動詞結合	82
第9章	結論	91
	参考文献	98
付録1	動作名詞を中心に見た機能動詞結合(韓国語)	105
付録2	動作名詞を中心に見た機能動詞結合(日本語)	118

2) 審査の方法および経過

- 2005年12月16日 第1回 審査委員会発足 各委員に論文配布 日程調整
2006年1月13日 第2回 論文内容検討(問題点等の指摘)・口述試験実施方針決定
2006年1月27日 第3回 口述試問
2006年1月27日 第4回 口述試験内容の検討 学位授与の可否の判定
2006年2月8日 第5回 審査結果報告書の作成および検討

3) 論文内容

本論文は、いわゆる「機能動詞結合」と言われるものが、日本語と韓国語においてどのような役割を果たしているかについて、いろいろな角度から対照しつつ解明しようとしたものである。本研究は、「機能動詞結合」の範囲を明確にしたうえで、言語学的手続きに従って一般の語結合と慣用句などの他の語結合から区別し、さらに「機能動詞結合」の日韓両言語における役割を明らかにしている。対照言語学的な視点から、インターネット内の新聞記事、新潮文庫のCD-ROMなどから用例を収集し分析するという方法をとった。

本論文は8章から構成されている。

第1章では、本論文の研究目的について述べている。

第2章では、機能動詞に関する日本語・韓国語の先行研究を紹介している。機能動詞の範囲について、どこまでを含めるかについて必ずしも明確ではないこと。また、最近、機能動詞構文を単一動詞構文に転換するなど機械処理をする機械翻訳の分野での重要性が指摘され、この機能動詞結合に関する研究が盛んに行われるようになってきていることなどを紹介している。

第3章では、これまでの研究が「機能動詞結合」の範囲をあまりに広くとりすぎて、その実体をはっきりさせない感があったことから、機能動詞結合の範囲を明確にするため次のように定義しなおす。動作名詞結合は、「動作名詞+助詞+機能動詞」の語結合とし、動作名詞については「形態的に動詞と派生関係にあることが認められるものの中で、動作的な意味内容を持つ名詞」、また、機能動詞については、「動詞そのものが持つ実質的な意味を失い、動作名詞と結びつき文法的な役割をするもの」と定義しなおした。このように定義することによって、例えば、「音がする」「地震がある」などの表現を排除することができる。

第4章では、日韓両言語における機能動詞結合を他の語結合から区別するための基準を設けると同時に、機能動詞結合が持つ統語的な性質を明らかにしている。その方法として、両言語における機能動詞に補助動詞と類似した特徴があることに着目し、補助動詞を複合動詞の後項要素や本動詞とを区別するための統語的な操作を適用し、他の語結合との間に統語的な振る舞いの違いがあることを論じている。

第5章では、機能動詞結合の内部に現れる助詞のパターンを基準にして、日韓語の機能動詞の分類を試み、動詞表現が名詞表現に転換する際にそれぞれの文の構造にどのような変化が起こるかを論じている。

第 6 章では、動詞表現が名詞表現に転換することによって得られる効果と、それに伴う修飾形式との関係について論じている。ある事柄をより詳細に、的確に描写するためにはいくつかの修飾や制限を加える必要が生じる。そのうち、語彙的な制限や修飾の役割を果たすのが形容詞や副詞であり、文法的な制限や修飾の役割を果たすのがアスペクトやムードなどを表す機能動詞であることを述べたうえで、動詞表現が名詞表現への転換によって得られる効果についても触れている。

また、修飾構造に関して、新潮 100 冊 CD-ROM 版で「判断する・判断を下す」と「感動する・感動を受ける」を含めて 20 数例調査した結果、機能動詞結合の場合、連体修飾を受ける用例が大半を占め、連用修飾を受ける用例がほとんどないことを指摘している。

第 7 章では、機能動詞の持つもう一つの重要な役割である文法的機能について、文文化という現象と併せて論じている。機能動詞の果たす文法的機能として、これまで「ヴォイス的機能」「アスペクト的機能」「ムード的機能」の 3 つあることが指摘されている。これらの機能は両言語において顕著な類似性を持つが、このうちもっとも多くの機能動詞が関わっているのが日本語・韓国語ともに「ヴォイス的機能」である。しかし、受動態に関しては韓国語のほうが機能動詞結合が豊富に使用されていることを指摘している。

第 8 章では、日本語と韓国語の機能動詞「いく」と「kada」、「する」と「nada」「tulda」、「うける」と「patta」を比較し、その類似点と相違点について論じている。ここでは、動詞の実質的な意味が異なっても、結合全体の意味が互いに一致していることが見られるとしている。

最後に、これからの課題として機械翻訳における他の表現への置き換え（換言）という視点から「機能動詞結合」を扱う研究の可能性について言及している。日本語におけるこの分野の研究はまだ過渡期の段階にあるとは言え、盛んに行なわれるようになっていけると言える。韓国語においても将来この分野における「機能動詞結合」研究が盛んに行なわれる可能性は十分にあることを指摘した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 門 脇 誠 一

副 査 教 授 小 野 芳 彦

副 査 教 授 津 曲 敏 郎

学 位 論 文 題 名

日本語と韓国語の機能動詞に関する対照研究

本論文の成果は次のように要約できる。

- ①これまであまりに広くとらえられていた「機能動詞結合」に対し一定の言語学的手続きに従って明確に定義しなおしたこと。
- ②機能動詞結合がしばしば学術的な硬い文体的な効果をもたらす原因の一つとして、動詞を名詞化することによる「意味の抽象化」があることを指摘したこと。
- ③動詞表現が名詞表現に転換する際にそれぞれの文の構造にどのような変化が起こるかを綿密に調べ、単一動詞の性質によって機能動詞結合における助詞の違いを生じることがあることを指摘したこと。
- ④「機能動詞」を「文法化」の一つと捉え、日本語研究で得られた知見を韓国語に適用し整理しなおし、日本語との類似点・差異点を明らかにしたこと。

さらに、まだ調査段階ではあるが、機能動詞結合の使用が韓国語においては口語と文語とで大きな違いが生じつつあることを指摘したことは重要である。

いくつかの問題については、まだアイデアの段階で終わっているものがあり、不十分な点も見られるが、これまでこの分野で日本語と韓国語との対照研究が皆無であったこと、また韓国内ではこの分野の研究がほとんど行なわれていない状況にあり、その意味で韓国内のこの分野の研究に一石を投じたことは大きな意義があると考えられる。

以上の点を勘案し、本論文に対し審査委員会は以下のとおり評価した。

審査の過程において、論文の構成、文章表現などに関し改善すべき点がいくつか指摘され、また十分考察を加えていない段階での記述があることが指摘されたが、本論文がこの分野における対照研究として最初のものである点、機能動詞結合に対して独自の基準を設けて定義しなおした点、さらに対照研究による新たな発見があった点に学問的な貢献が見られると判断した。当委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに十分値する学問的価値を持つものと全員一致して認めるものである。